ェーターに閉じ込められた（「とても楽観的だったので、深刻には受けとめませんでした」[15]）。

ブリュッセルのパフォーマンスの五日くらい後に、ケージはデュッセルドルフで、《ミュージック・ウォーク》と題された冒険的な新しい音楽作品を発表した。「一人もしくはそれ以上の人数のピアニストのため」にデザインした作品で、「ピアニストはラジオも操作し、歌うかもしくは他の手段によって補助的な音を出す」とケージは楽譜のなかで説明している。しかしながら、この作品の斬新さと重要性は、ケージがこの曲を作曲するために考案した多面的で広く応用がきく仕組みにある。彼は《ヴァリエーションズⅠ》を書いたときに、この仕組みの初期の形態を試していた。《ピアノとオーケストラのためのコンサート》からピアノのソロのセクションをひとつとり出して、任意に配置した五本の線を記した五枚の四角いプラスティックの透明版をその上に置き、そこから読み取りをすることによって、この曲を作曲し直した。《ミュージック・ウォーク》では、より独立した仕組みをつくった。五線譜に似せて、五本の線を記した一枚の四角いプラスティックの透明版を、音のイヴェントを象徴する点のついた九頁と点のついていない一頁の上の任意の場所に置くのである。ケージは楽譜を裏返すだけでなく、逆さまにひっくり返すこともした。この仕組みを使って、ピアニストはそれぞれ自分の楽譜をつくる。ピアニストは音響効果による寸劇のプロデューサー兼パフォーマーとなって、ひとつの楽器に一緒に座り、自由に場所を変えて、たとえばラジオの空電や声、ガラスの割れる音、足音、サイレンを鳴らす。

ハインツ＝クラウス・メッツガーの紹介で、ケージとチューダーは、多くのアーティスト、作曲家、作家の間で人気のあるデュッセルドルフのギャラリー「ガレリー22」で《ミュージック・ウォーク》を初演した。三人目のピアニストとして、シュトックハウゼンのアシスタントとして働いていた若いイギリスの作曲家、コーネリアス・カーデューが加わった。ケージはこの時期になると、透明素材の使用は不確定性による作曲にとって本質的だと見なすようになっていたようだ。実際、彼は不確定性そのものを「読み取りをするために、どのようにも重ねることのできる透明版上に素材を提供するもの」と規定し始めていた。

一一月のはじめ、ケージはルチャーノ・ベリオの招きで、この新しい考え方をミラノに持って行った。磁気テープのために不確定性の曲をつくる計画だった。そう望んだことで、ケージは頭を悩ませた。というのは、《ウィリアムズ・ミックス》を制作したときの長時間の労苦を思い起こしたからであり、また彼の聞いたテープ音楽がすべて「完全に死んで」いるように聞こえたからである。「「テープ音楽が」生きたものになるまでやりたくはないのですが、できるといいと思っています」[16]。費用を捻出するためにいくつかのコンサートに関わる計画を立てたが、ベリオがイタリアの国立ラジオ・テレビ放送局（RAI）に創設した電子工学スタジオで、より多くの時間を過ごした。ここでケージは、作業場と技術的な補助、ランダム・ナンバー発生器を含む機材の提供を受けた。ランダム・ナンバー発生器は、コイン投げをして偶然性を選択する必要をなくしてくれた。彼はイタリアのエンジニアは素晴らしいと思い、彼らがケージの仕事ぶりに「驚嘆」するのを楽しんだようだった。その仕事とは「鋏とカミソリなどを持って座り、一日一二時間、目眩がして目がよく見えなくなるまで作業をする。そしてたくさんワインを飲む」[17]ことだった。あるエンジニアはシチリア島で、ドワイト・D・アイゼンハワー司令官の指揮下にあるアメリカ軍と戦ったことがあった。捕虜になった後、彼はアメリカ側で戦った。ケージは残ったテープを、当時大統領になっていたアイゼンハワーに送るようにと彼に勧めた。

ケージは磁気テープを使って不確定性の音楽を作曲する仕組みを考案した。ミラノの女家主へのお礼に、彼はその曲を《フォンタナ・ミックス》と呼んだ[18]。その主要な構成要素は、さまざまなカーヴを描く線（繋がった線と点線、さまざまな太さの線）が記された一〇頁の紙、点が書き込まれた一〇枚の透明版、二〇〇〇個の正方形の格子が印刷された長方形の透明版、一本のまっすぐな実線が記された透明版である。この仕組みを使うために、作曲家は曲線の描かれたページを一枚選択し、その上に点のついた透明版を載せ、その上に格子と実線を記した透明版を重ねる。この直線とさまざまな曲線、点、格子の枡の交差点が、音のタイプ、持続、音量、テープを繋ぐパターンを決定する。望ましい曲の長さにしたがって、この仕掛けの構成要素は、さまざまな位置で組み合わされ、また組み直される。そしてその結果が前もって集められ、カタログ化された音素材の入ったテープに適用される。

ケージは他のテープ音楽作曲家に使ってもらうことを意図して《フォンタナ・ミックス》を制作した。しかしながら、彼はこの仕組みを自分自身で使って、ミラノでリアリゼーションを行い始めた。ステレオ装置が急行列車のように驀進し、犬の吠え声、水しぶきの音、イタリア語の話し声、サラサラ音をたてる紙、合唱音楽、ブクブク音をたてる電子音を鳴らした。ケージが最初の三分間をベリオに聞かせると、彼は「まったく間違っている」と言って、きちんとやり直す手助けを申し出た。「私は黙ったまま猛烈な怒りを感じました。そして音を持って、帰国しようと思いました」[19]とケージは書いている。かわりに、ボッケッティ（芝生の上で行なうイタリアのボウリング・ゲーム）を一緒にやったことのあるエンジニアが、気にしないようにとケージに言ってくれた。「あなたがやっていることが、あなたのすべきことです」。その言葉に励まされて、ケージは作業を続けた。しかしヨーロッパ人は「自分の耳じゃなくて、芸術を通して聴いている」[20]とケージは友人に語った。

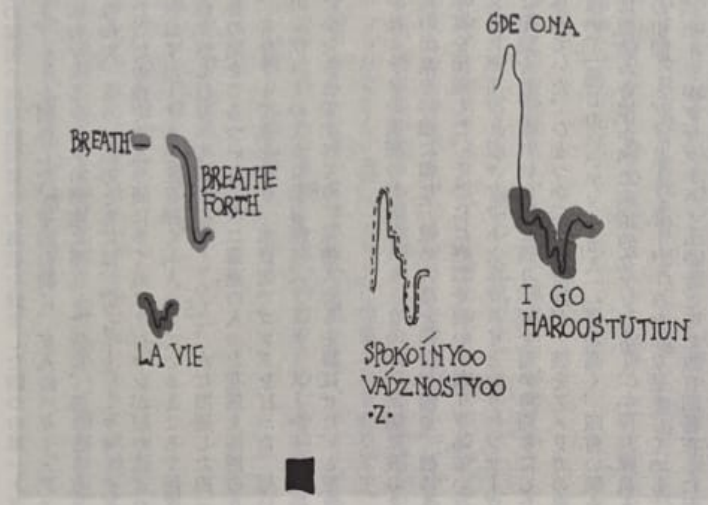
不確定性についての新しい考えが、声楽や演劇作品にも適用できるのではないかという考えがケージに浮かんだ。その年が終わる前に、彼は《アリア》を作曲した。どのようなテンポでも、また一人でも、《フォンタナ・ミックス》と一緒に、あるいは《コンサート》のどのパートとも一緒に歌うことのできる作品である。この視覚的にも鮮やかな二〇頁の仕掛けは、ノイズを表す一六個

の黒い四角、一〇種類の歌唱スタイルを示す八種類の色による曲がった実線や点線、また母音と子音によるテクスト、アルメニア語、ロシア語、イタリア語、フランス語、英語による言葉からなっていた。

ケージは一九五九年一月五日、これらの新作が演奏されるのを聴いた。それは米国文化情報局がローマのエリセオ劇場で、彼の音楽のコンサートを主催したときのことである。ここで〈アリア〉は、一二分間の〈フォンタナ・ミックス〉のリアリゼーションと同時に、ベリオの妻で技巧的なメゾソプラノ歌手、キャシー・バーベリアンによって歌われた。ケージが自らの力作を実現してくれるコンポーザー・パフォーマーに与えた自由を、彼女は十分に利用した。バーベリアンがいくつかの外国語の断片を発するのに選んだ一〇の歌唱スタイルは、ジャズ、フォーク、東洋風、赤ん坊、鼻音、マレーネ・ディートリッヒから採られている。仕掛けの黒い四角は、歌に続いて、あるいは歌を中断して出される一六種類のノイズを示しており、バーベリアンはその喉から、苦しそうな息の吸入音、犬の吠え声、ブーブーいうやじ、ネズミを見て出す金切り声、アメリカ・インディアンが出すウグッという声、そして性的な喜びの表現を吐き出した。ケージは彼女のことを「見事だ」、素晴らしいと思い、「なんという存在感[31]！」と言った。しかしまた、他の素晴らしい歌手たちと同じように、彼女が「最高[32]」を目指すやり方には反対だった。冗談（？）からか、彼は「それぞれきわめて自主的な」一二人のソリストのための声楽作品を書くつもりだと言った。それは「ハリウッドで考えられている精神病院のように」聞こえる作品だという。

二週間くらいたってから、ケージはミラノの一〇角形の円形建築ロトンダ・デル・ベレグリニで行なわれた、意義深いとともに厳しく批判もされたコンサートで、自分の作品を自ら演奏した。彼は〈ピアノのための音楽一―八四〉のひとつ（弦を弾き、大きな音をバンと叩く）とフェルドマンの二つの短い静かなピアノ曲を演奏した。フルート奏者とヴァイオリニストが、〈コンサート〉のひとつのセクションを演奏した。プログラムはまた器楽アンサンブルをとりあげ、比較的若い他の三人の作曲家たち、イタリア人のワルテル・マルチェッティ、ペルー人のレオポルド・ラ・ローサ――二人とも二八歳――と三二歳のスペイン人ファン・イダルゴのそれぞれ二作品を演奏した。注目すべきことに、コンサートで演奏されたこれらの作曲家の作品全部が、偶然性によっており、ケージ自身の作品の多くに響きが似た、また彼の美学に深い影響を受けた作品だった。このコンサートは結果的に、生まれつつある国際的なケージ楽派の成果を提示していた。

批評の反応はまさに嫌悪に満ちたものだった。さまざまなミラノの新聞が、このイヴェントを「よくできたジョーク」「退屈な音のしたたり[33]」として片づけた。ある批評家は、「資本主義社会に疎外が起きている特徴的な時期に」、自分の作品を若者たちに売った北アメリカ人を非難した。ケージはおそらくはこうした批評を指しながら、批評家たちが「いつものように怒り狂った[34]」と述べて



〈アリア〉より

いる。そしていつものことだが、彼は人々の激怒にたいして、穏やかな無関心をもって応えた。ある友人は、こうした傷つかないあり方を「昔のホッケーのプロの遅しさ[35]」に喩えている。

おそらく疎外されてはいたが、「資本主義社会」はミラノ滞在の最後の一ヶ月の間、ケージに恩恵を与えた。イタリアが好景気の波を謳歌した一月、ケージはイタリアではじめて大きな成功を得たテレビのクイズ番組「いちかばちか（ゼロか二倍か）」に出場した。アメリカの人気番組「二倍かゼロか」や「六四〇〇〇ドルの質問」をもとにしたこの一時間番組は、木曜の夜九時に放送されていたが、その後には少なくとも一度、NBCの人気番組「ペリー・コモ・ショー」の再放送が行なわれたことがあった。集まった人々が番組を見て、質問について議論し、出場者――女優のジーン・セバーグのような有名人であることもある――を熱っぽく贔屓にしたり、批判したりする。ケージがどのような経緯で出場者になったかは不明だが、おそらくルチャーノ・ベリオを通じてだろう。その過程はケージにもよく分からなかった。「そのことを誰かに知らせるつもりはなかったんです。というのはクイズがどのように変則的に行なわれているかについて、いろんな噂話があったからです[36]」とケージはテューダーに言っている。彼は「入室禁止」と記されたドアを出入りしたことに気がついた。

ケージは〈フォンタナ・ミックス〉の仕掛けを使って、「いちかばちか」に出演するうちの二回で演奏する三分間のソロの曲を作曲した。そのうちの一回のために、彼は〈ヴェネツィアの音〉